

# 釣れ釣れなるままに

2001年思い出の釣行記 PART. 1

# 釣れ釣れなるままに

## 鹿島釣狂

### 釣遊会第1回大会

☆開催日 平成13年4月22日

☆開催場所 豊浜港～栄浜港

☆入釣場所 鷹の巣トンネル裏

☆釣果 無し

### 釣りにキチ

職場のボスが定年退職し、新任の親分が赴任して来た。差し詰め、アメリカ全土に君臨したアル・カポネから任侠道に生きる清水の次郎長というところか。これからタッグを組み職務を遂行していかなければならないこともあり、女房と共に親分子分の盃を交わすことになる。奥様（極道の妻たちにはない気品がある）の手料理に舌鼓を打ちながら勧められるままに日本酒を押しいただく。いつから仕込んだものだろう？煮物が旨く、注がれるままに盃を呷った。

お互いの趣味についても話が進み、親分は山菜採りやゴルフ、そして釣り(^o^)もやる（博打、女、酒は嗜まないというから親分というより・・・）と言う。私は仕事が趣味であると申し上げたが、隣に座った女房が「釣りにキチ（狂）がつきます」と話している。親分

は豪放磊落を絵に描いた様であり、コンビを組むには私の臆病さ（冷静沈着に細心の注意を払い慎重に物事を進める。コホン）とマッチしていると思われる。

2000年は思いがけず5回平均1146点の記録で年間総合優勝を果たしたこともあり、今年はのんびりとしかも優雅に釣り大会に参加したい。そして、全ての大会で過去には入釣経験のない海岸に立ち、自分の穴場を開発してみようと考えている。さしずめ、第1回大会は大平川平盤か栄浜平盤に入釣する予定である。

## へっぴり腰の体たらく

2001年の冬は例年になく大雪に併せて地下に埋設された水道管さえも凍てつくほどの厳寒であった。幾日も続いたシバレが地下深くまで凍土として浸透し、北海道の水道管の埋設基準さえ再考しなければならない冷え込みなのである。しかし、3月には平地を覆っていた雪が急速に融け始め、4月の声を聞くようになると山々に残雪が光るようになった。寿都の山々の稜線が下弦の月明かりで僅かにほの白く見える。これから日一日と雪渓が様々な形に変化し、雪白水の終焉とともにやがては全く消滅してしまう運命となるのであろう。

天気予報は、2m～3mの波を予報し、朝方は冷え込むことを告げている。しかし、弁慶岬をかわして海を眺めると結構な波が打ち寄せられており、大平川河口に入るのは断念せざるを得ない状況である。

吉井氏が鷹の巣トンネル裏へ行くという。私にとっては一度も入ったことのない所であり、氏に同行を願うと快諾してくれる。下見を繰り返した島氏の話では、空身でトンネル裏に向かったが、行程がかなり厳しく途中まで行って断念して戻って来たとのことである。果たしてあの重いリュックを担いでたどり着くことができるのであろうか。

大平川に架かる橋を通過し、鷹の巣トンネルを抜けたところで吉井氏と共にバスから降りる。そこからもう一度トンネルに沿った砂利道を戻ることになった。釣り人しか通らないような獣道になった所で一旦、急な勾配の土手を下りた。リュックの重みでへっぴり腰となり、かかととリュックと我が尻の3点が急坂になった草原を擦りながら落ちて行く。土手を下りたところからは、海岸縁のゴツゴツした岩の上を延々と歩くことになる。私より吉井氏の体力が勝り、彼との差が徐々に開いていく。吉井氏のキャップライトが見え隠れする程の距離になった所で彼が歩みを止め、荷物を下ろした。その前の大きな岩の先に出ると言う。私は更にそこから50m程行った所に乗れそうな平盤があったので、そこに荷物を下ろす。

## 足元を洗う波

時々、打ち上げられた波が足裏をサラサラと洗っていく程度で危険と言うほどのことではない。早速、磯回りのカジカを狙ってちょい投げで3本共打ち込む。アタリはなかなか出ない。吉井氏もアタリがない上、波が岩盤に上がってくるので、私のさらに先の盤に移

動して行った。私の方も一度だけ大きなアタリがあるものの掛けるまでには至らない。さらに3時の満潮に向けて波が岩盤の上を伝い、くるぶしまでかかるようになって来たので移動することになる。

航空写真を見ながら何度か釣り風景を心に描いたことのあるワスリに上がる事にする。空身で様子を伺いに行ったが、途中の大岩が行く手を阻むように迫り出している。そこをくぐり抜けワスリに上がり波を確認する。時たま寄せるうねりのために海水が岩盤上の低いところをチョロチョロと流れる程度であり、何とかやれると判断する。元の場所に戻り、荷物を全部片付け改めて移動し始める。やはり、途中、狭くなった岩と岩の透き間に体を入れたが、背中のリュックが通り抜けなくて引っ掛かった。それで、いったんリュックを下ろし、岩と岩の間が広がっている高い所まで持ち上げなければならなくなった。

やっとの思いでワスリにたどり着いた。時折思い出したように、岩の先端にぶつかった波が岩の上を乗り越えて足元を通過していく。その波で濡れないようにと少し小高くなった所に荷物を置き、3本とも打ち終えた。

## 掟破り

大気はかなり冷えて来たが、重い荷物を担ぎ岩の上を上り下りした為に汗がドッと吹き出す。狙いの場所にやっとな竿を出し終えた安堵感もあり、防寒着を脱いでおもむろにウェィダーをずり下げる。そして、我が一物を取り出し放水。

「絶対に海に背を向けるな」との掟を破ったのがいけなかった。背後にドッカーンという音の後、ザバザバ、ドドッと頭から海水が降り注いできた。下げたウェィダーの中に海水がドットと入り込んだ。防寒着を脱いでいたために中に着込んだセーターもずぶ濡れになる。そして下着にまでじわじわと海水が染み込んで行く。

足元を流れた波は小さいものであったが、水が通過していく一瞬、奇妙に足のまわりがやわらかくなっていく感じがした。岩盤の上一面を、小さな生き物のように動いていく沢山の白いあぶくが3本の竿尻を押し流していく。

岩盤においた餅バケツが流されて、餅のサンマと共に海面の上を漂っている。イカゴロは半分ほど波に持っていかれ、これもプッカリプッカリと波間に浮かんでいる。散乱したイカゴロを拾い集める。撒き餅の入ったバケツは辛うじて岩の透き間に引っ掛かり難を逃れたが、海水がどっさり入ってしまったては使い物になりそうもない。

しかし、私はその後すぐに被害はもっと大きいということに気が付いた。横倒しになった竿を持ち上げると、リールの取っ手が折れていてリールシートから外れているのだ。私にとっては高嶺の花で、なけなしの小遣いを叩いてやっとな揃えたものである。少し小高い岩に置いたリュックとその中に入れておいた虫類は何とか無事であった。大波は一度きりで終わり、その後は先程までと同じように今の騒ぎを取り繕うような感じで優しくゆるやかに打ち寄せるだけであった。

## 羽衣を纏った天女

一気に、戦意喪失。下の一物と共に気持ちも萎えていく。これから先、さらに冷え込む事を考えると朝まで体が持つだろうか。暖をとるにも、辺りには木切れが一切無い。ここは一旦撤収し、バスを降りたところに戻り、その後のことを考えることにしよう。荷物を全て片付けてから吉井氏に事の顛末を話す。

「今、やめるな。竿を投げ入れていれば、おのずと体が動く。そうしているうちに徐々に乾いてくる。何もせずじっと帰りのバスを待つのは余計に辛いぞ」

そう言われればその通りである。さらに続けて、「お前、手のところケガしているぞ」と言われて、見ると右手の親指からかなりの出血がある。荷物を片付ける時に大きく転び、手の痛みを感じたが、次から次へと頭に浮かぶ悪夢がそのことを忘れさせている。吉井氏が彼のリュックから7つ道具を取り出し、その中のカットバンを私に手渡してくれた。此の時はさすがに吉井氏の厳つい顔も羽衣を纏った天女に見えた。(釣遊会の仲間なら天女なんて絶対有り得ないと思うがその時の自分は・・・) 多分、吉井氏も何度か苦い経験をしておりその辺の準備は怠らないのだろう。ありがたく受け取る。

吉井氏に話したことで少し気持ちが落ち着き、とにかく竿だけは振ることにする。元の場所より後ろに下がって安全なところに場所を構える。さらに、心を落ち着かせようと胸ポケットに入れてあったタバコを取り出す。しかし、これはびしょ濡れで吸えるものではない。改めて、リュックに詰め込んだ予備のタバコを取り出す。これは、セロファンが被さっているので無事であった。震える手でその1本を取り出しライターを擦る。しかし、いくら擦っても炎が出ない。予備のライターもことごとく同じ状況にある。こんな時に、タバコなど……。しかし、タバコが吸えないとなると、無性に吸いたくなるのが愛煙家(?)のサガである。またまた、吉井氏に告げると今度も不測の事態の為に用意した取っ置きターボライターをお貸しいただく。天女を超えた神様、仏様、吉井様。

## 撃沈

タバコが吸えたことでさらに気持ちが落ち着き、一旦仕舞った竿を改めて取り出した。破れかかったイカゴロと虫餅をつけて(何と不釣り合いな)打ち直す。しかし、アタリは無く、底荒れしているのか一投一投が根がかりする。2カ所ほど移動するも同じ状況である。吉井氏は入り江で波が死んでいる畳み2畳ほどの一カ所のみで釣りをしている。普段なら絶対に打ち込むことはないような場所である。そこでカジカもホッケも順調にあげている。

他に波の死んでいるところはないのか。もう一度辺りをうろついてみる。何とか1カ所だけ釣りになりそうな場所があったのでそこに最後に移動することに決定。海水でどろどろになった撒き餅を流し込んでから荷物を移動する。そしてイソメのエサでちょい投げする。しかし最後の足掻きも全くアタリが無く、空しく撃沈する。

釣遊会に入って初めてのボンズである。過去の最悪の天候に比べたらさほど悪い条件で

はない。今までの最低点はオンコの沢でのハゴトコ4匹297点であった。情けないが最低点の記録更新である。これより下の記録更新はない。

## 心の灯火

寒さにいよいよ堪え切れなくなり、かなり早い片付けて帰途につく。吉井氏が「俺も片付ける。一緒に帰るぞ」と声をかけてくれるが、寒さが極限状態のため、一度進めた歩みを止められず先に進む。友達ガイのない奴だと思われただろうが震える膝の歩みを止められない。

釣り場に向かう時は海岸線の岩の上を歩いたが、明るくなって見ると山側に防潮堤がついているのが分かり、その上の平らなところを歩く。ゴツゴツした岩の上を歩くことを思えば随分と歩きやすい。が、しかしである。途中でその防潮堤が途切れ、しかも防潮堤はかなり高くなっており岩浜に下りることができない。もう一度、防潮堤から下りることのできる所まで引き返すことになる。ついていない時はこんなものだろうか。へっぴり腰で下りた土手を息を切りながら闇雲に上っている時には吉井氏に追いつかれてしまった。しかも、吉井氏は悠々と海岸縁を歩いており、他の釣り人と談笑などを交わしている。私には次回のためというその元気は全く無い。

バスから降りた所にやっと辿り着いた。そこでは他の釣り会のメンバーが焚き火にあたっている。私もその輪の中に加えていただく。私の濡れた服から湯気が濛々と出てきて、たまげている観衆にその訳を説明しなければならなくなった。ウェィダーを脱ぐと全身から湯気が吹き出し、辺り一面霧がかかったようになる。あまりの恥ずかしさに、一時、焚き火から離れた。その隙に丁寧に火が消され、その一行はバスで立ち去ってしまった。

吉井氏が戻って来た。バスが来るまではまだ時間があるのでもう一度火をつける。薪を集めていると吉井氏が「おまえは火に当たっている」と薪を集めてくべてくれる。天の岩戸に閉じこもる天照大神（アマテラスオオミカミ）を出してくれた天鈿女命（アメノウズメノミコト）の心遣いに又々感謝、感謝。吉井氏が踊る姿はあまり想像したくないのだが、心も体も温かくなる。

審査結果は

優勝	吉田潤一	1122点	(ホッケ 436mm+アブラコ 372mm+3340g)	原歌
準優勝	高橋昭吾	1089点	(ホッケ 395mm+カジカ 373mm+3210g)	永豊
3位	島強二	1038点	(アブラコ 391mm+カジカ 388mm+2590g)	狩場
4位	安曾和夫	1022点	(ホッケ 416mm+アブラコ 324mm+2820g)	原歌
5位	矢根政仁	1022点	(ホッケ 390mm+カジカ 361mm+2710g)	蒲原

であった。

第2回大会は仕事の都合で参加できないことが確定しており、リベンジすることは叶わない。第3回大会では必ずやこの仇を打とうと私の熱き胸は沸々と燃え盛るのである。請うご期待！